

医 学 部

I	医学部の教育目標と特徴	8-2
II	分析項目毎の水準の判断	
	分析項目 I 教育の実施体制	8-4
	分析項目 II 教育内容	8-8
	分析項目 III 教育方法	8-11
	分析項目 IV 学業の成果	8-15
	分析項目 V 進路・就職の状況	8-18
III	質の向上度の判断	8-22

I 医学部の教育目標と特徴

1 医学部の沿革

明治 26 年に共立富山薬学校在創立され、その伝統を引き継いだ富山大学薬学部に、新設の医学部が加わり、医学と薬学の有機的連携と東西医学の統合という設立理念の下、昭和 50 年 10 月 1 日に富山医科薬科大学医学部が誕生した。

平成 17 年 10 月に、富山医科薬科大学、富山大学、高岡短期大学が（新）富山大学に再編・統合され、富山大学医学部となった。

2 教育目標

富山大学は基本的な目標として、資料 1-1 に示す基本理念を掲げている。

資料 1-1 富山大学の基本理念

地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化と人間社会の調和的発展に寄与する。

(出典：富山大学中期目標前文)

医学部では、この基本理念を達成するために、資料 1-2 に示す教育目標を定めている。

資料 1-2 医学部の教育目標

生命の尊厳を理解し、医療人として不可欠な深い倫理観と温かい人間性を備え、専門的知識及び技能を生涯にわたって維持し向上させる自己学習の習慣を持ち、国際的視野に立ち医学、医療の発展、及び地域医療等の社会的ニーズに対応できる人材を養成すること。

医学科では、日々進歩する医学の知識、技術を身に付け、医師・医学者として、豊かな人間性を備えた医療の実践及び医学の発展に取り組むことのできる人材を養成する。

看護学科では、全人的な看護の役割と責務を認識し、看護師、保健師及び助産師として専門的な対応ができる人材を養成する。

(出典：医学部規程)

3 特色ある教育活動

医学部は、昭和 58 年に、大学附属病院に和漢診療部、平成 5 年に医学部に日本で最初の和漢診療学講座を開設した。昭和 63 年には、WHO 伝統医学協力センターに指定され、伝統医学の教育研究の国際的交流を促進している。

平成 15 年度 21 世紀 COE プログラムでは、「東洋の知に立脚した個の医療の創生」、平成 16 年には、戦略的創造研究推進事業「情動発達とその障害発生機構の解明」が採択され、個体を体系的に促える東西の医学的アプローチにより内外と連携しつつ全学で教育研究を推進しており、医学部の教育目標のもと、資料 1-3 に示す特色ある教育活動を具体的にを行っている。

資料1-3 医学部の特色ある教育活動

1. 医学科では6年、看護学科では4年の一貫教育を行っている。教養教育では、専門を学ぶ前段階としての「基礎学力の向上」及び、より一般的な「知的人間性の育成」を課題として教育を実施している。1年次の「医療学入門」及び2年次の「和漢医薬学入門」では、薬学部の学生も含めて各学科の学生と一緒に学べるよう工夫している。また8学部の総合大学の特長を生かした共通教育も始まった。
2. 医学科の専門教育では、臨床前教育として、臨床の各科に基礎医学の教員も加わり教員がチームを組んで統合的に各臓器・疾患の教育を行っている。なお、5年次の臨床教育に入る前に臨床前教育に関する知識と実技の全国共用試験に合格する必要がある。臨床教育では、大学附属病院と県立中央病院での各科の臨床実習に加え、選択制臨床実習が地域や海外の病院で実施されている。
3. 看護学科の専門教育においても、基礎看護、臨床看護、地域看護領域の看護学を教授し、臨地実習は、大学附属病院の他、多くの地域関連教育施設の協力のもと行われている。また、平成16年度から看護師・保健師統合コースに助産師養成コースを開設し、育成を開始した。

(出典：富山大学医学部ガイド)

4 想定する関係者とその期待

在校生及びその家族、卒業生の雇用者(大学附属病院やその他の医療機関、保健所など)、地域社会・住民が関係者として想定される。

在校生及びその家族の期待は、医療人に求められる基本的な倫理観、医学知識、技能を習得し、医師や看護師・保健師・助産師の国家試験に合格することにある。

医療機関等の期待は、倫理観と温かな人間性を持ち、チーム医療の一員として医療の実践、専門的な対応ができる医療人を育成することにある。

地域社会の期待は、地域住民の医療、保健を担いその向上に尽力する医療人を育成することにある。

大学附属病院の期待は、高度の医療を実践できる知識と技術を習得する自己学習の習慣を持ち、医学・医療の発展に寄与できる人材を育成することにある。

II 分析項目毎の水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点毎の分析

観点 1-1 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

医学部の内部構成：

医学部は医学科と看護学科から構成され、学生定員と現員は資料 1-1-1 に示すとおりである。

資料 1-1-1. 医学部の学生定員と現員 (平成 20 年 5 月 1 日現在)

	入学定員	収容定員	現員						計
			1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	
医学科	90 (5)	565	91	109	81	99	94	95	569
看護学科	60 (10)	260	62	61	73	67			266
計	150 (15)	825	153	173	154	166	94	95	835

()内は編入学定員 (外数) (単位：人)

(出典：学則及び教務チーム資料より抜粋)

教養教育と専門教育：

医学部では資料 1-2 の教育目標を達成するため、①知的人間性の育成と専門基礎教育 (専門教育への導入段階の教育) を目的とした教養教育、②専門知識、基本的技能、思考力、倫理性、感性、自立的学習能力等を有する優れた社会人、職業人の育成を目的とした専門教育を行っている。

教養教育は、医学部・薬学部教授会所属の学科目担当教員を中心に教養教育教員会議を組織し、人間文化科学系、生命健康科学系及び自然情報科学系に分かれ、教育を行っている。

専門教育は、①医学科では、基礎医学系、臨床基礎医学系、臨床医学系及び社会医学系に、②看護学科では、人間科学系、基礎看護学系、臨床看護学系及び地域・老人看護学系に分かれ、医学部教員により教育を行っている。

教員の配置：

医学部には、教員組織の研究部と教育組織の教育部があり、すべての教員は研究部と教育部に所属するが、教育責任を明確化するため、教養教育、専門教育ともに各系に対し資料 1-1-2 に示す人数の教員を配置している。大学設置基準を満たし、医学科のモデル・コア・カリキュラム、及び、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に基づいたカリキュラムを遂行するために必要な専任教員を確保している。

資料 1-1-2 教員の配置状況(平成 20 年 6 月 1 日現在)

		教授	准教授	講師	助教	助手	計
教養教育	人間文化科学	2	2				4
	生命健康科学	3	1		1		5
	自然情報科学	3	1		1		5
	計	8 (3)	4 (5)	0	2 (1)	0	14 (9)

()内は薬学部に所属し、医学部の教育にも携わっている学科目教員数 (外数)

専門教育

医学科	基礎医学	6	5		10		21
	臨床基礎医学	7	5	1	12	2	27
	臨床医学	20	17	2	46	1	81
	社会医学	2	2		5		9
	計	35 (2)	29 (8)	3 (33)	73(45)	3 (1)	143 (89)

()内は附属病院の教員 (外数)

看護学科	人間科学	2					2
	基礎看護学	1		2	1		4
	臨床看護学	3	1	1	8		13
	地域・老人看護学	2	1	1	2		6
	計	8	2	4	11	0	25

(単位：人)

(出典：医薬系支援チーム資料より抜粋)

観点 1-2 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

医学部では毎年、教育内容及び教育方法の改善に向け学科別にファカルティ・ディベロップメント (以降 FD) 又はワークショップを実施している。特に平成 17 年度の医学科及び平成 19 年度の看護学科 FD では、学生を参加させ医学部の教育の改善方策について教員とともに検討した。

教養教育では、教養教育教員会議のもとに、独自に各種アンケート、FD を実施している。

平成 16 年度以降の FD 開催状況及び実施内容 (参加者数を含む) は資料 1-2-1 のとおりである。

資料 1-2-1 FD とワークショップの開催状況

年度	学科	実施内容	開催日	参加者数
H16 年度	医学科	チュートリアル教育に関するワークショップ	H16. 8.21 ~22	50 人
	医学科	チュートリアル教育に関する FD	H16. 9.11	20 人
	看護学科	新カリキュラムに関する FD	H16.10. 2 ~ 3	28 人

	看護学科	効果的教育手法及び看護研究における倫理的対応に関する FD	H17. 8. 18 ～19	25 人
H18 年度	医学科	チュートリアル教育に関する FD	H18. 7. 14	23 人
	医学科	チュートリアル教育に関する FD	H18. 9. 29	25 人
	医学科	チュートリアル教育に関する FD	H18. 10. 20	29 人
	医学科	C B T 問題等作成のためのワークショップ	H19. 2. 2	34 人
	医学科	C B T 問題等作成のためのワークショップ	H19. 2. 19	44 人
	看護学科	富山県看護職員の養成のあり方検討会における指針，総合実習科目に関する検討及び大学教育支援プログラム（特色 GP）・外部からの競争的研究資金への応募に関する FD	H18. 9. 21 ～22	24 人
H19 年度	医学・薬学・教養合同	高校教育，大学における教養教育，専門教育の連携に関する FD	H19. 8. 25	医学部 30 人
	医学科	医学教育の現状と課題及び評価法とフィードバックに関する FD	H19. 10. 27	25 人
	医学科	C B T 問題等作成のためのワークショップ	H20. 2. 1	25 人
	医学科	C B T 問題等作成のためのワークショップ	H20. 2. 18	12 人
	看護学科	メンタルヘルスと学生支援に関する FD	H19. 9. 8～ 9	37 人(学 生 9 名)

(教養教育の FD を除く)

(出典：平成 16・17・18・19 年度医学部医学科 FD，ワークショップ報告書
平成 16・17・18・19 年度医学部看護学科 FD 報告書)

医学科では平成 13 年度から学生による授業評価アンケートを開始し，授業の改善につとめている。調査結果は教員に迅速にフィードバックされており，この結果，学生の授業評価アンケートの平均値は年を追うごとに高くなっている。一例として，授業への満足度及び理解度を資料 1-2-2 に示す。

資料 1-2-2 医学科学生による授業評価アンケート結果

年度	対象年次	授業への満足度	授業の理解度
H16 年度	3・4 年次	2.94	2.93
H17 年度	3・4 年次	3.02	3.03
H18 年度	3 年次	3.26	3.25
H18 年度	4 年次	3.22	3.22
H19 年度	3 年次	3.24	3.14
H19 年度	4 年次	3.45	3.47

(全専門科目を対象，4 点満点の平均値)
(出典：医学科教務委員会調査資料抜粋)

看護学科では、H17 年度に比して H18 年度の評価が極く僅か低下しているもののほぼ誤差の範囲内であり、その数値自体は高い水準を維持している（資料 1-2-3）。

資料 1-2-3 看護学科学生による授業評価アンケート結果

	授業の満足	授業の理解
H17 年	3.73	3.72
H18 年	3.67	3.65
H19 年	3.69	3.66

（専門科目を対象。5 点満点の平均値）

（出典：教務チーム資料より抜粋）

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

教育組織としては設置基準を満たす教員を配置している。教育内容・方法の改善に向けて、毎年 FD やワークショップを複数回開催し、医学・看護教育のあり方や、学生評価に不可欠な試験方法に関する理解を深め、実際に教育・評価方法の改善に直結する提言を行ってきた。その結果、医学科学生による授業評価の平均点が年度ごとに上昇してきている。これは授業評価を単に形式的に行っているのではなく、各教員にフィードバックし、教員自身の取り組む姿勢にも変化が現れてきている証拠と理解できる。一方、看護学科では、高い評価を保っている。

以上のことから、医学部の教育の実施体制は、期待される水準にあると判断する。

分析項目 II 教育内容

(1) 観点毎の分析

観点 2-1 教育課程の編成

(観点に係る状況)

教養教育科目の編成と授業科目の配置：

教養教育科目は、教育課程を①人間文化科学、②生命健康科学、及び、③自然情報科学の3系に区分して編成している。専門教育課程における理数系科目の基礎力の重要性に鑑み、数学、物理学、化学の3科目に関しては、平成18年度から習熟度別クラス編成を展開している。具体的には、1学年の学生をA（上級）クラスとB（基礎）クラスに分け、BクラスはAクラスの2倍の時間をかけて授業を行い、基礎力の拡充を図っている（資料2-1-1、別添資料1）。

資料 2-1-1 習熟度別クラス編成の授業科目受講者数

	解析学 A	解析学 B	物理学 I A	物理学 I B	基礎化学 A	基礎化学 B
H18	51	38	52	30	43	40
H19	62	30	55	37	46	46

(単位：人)

(出典：教務チーム資料より抜粋)

習熟度別クラス編成の導入後、授業の理解度が向上し、授業に興味を持つ学生の割合が増えてきた（資料2-1-2）。

資料 2-1-2 習熟度別クラス編成導入前後の授業アンケート結果の一例（物理学）

	選択肢（下記参照）				
	5	4	3	2	1
Q4 授業の内容に興味がありましたか？					
平成16, 17年度 物理学 I	7	18	44	21	9
平成18, 19年度 物理学 I A	9	20	51	16	5
平成18, 19年度 物理学 I B	7	30	43	15	5
Q10 授業の内容は理解できましたか					
平成16, 17年度 物理学 I	3	5	27	45	20
平成18, 19年度 物理学 I A	4	19	43	26	9
平成18, 19年度 物理学 I B	2	12	45	30	11

(単位：%)

Q4の選択肢：5=つよくそう思う、4=ややそう思う、3=普通、
2=あまりそう思わない、1=まったくそう思わない。

Q10の選択肢：5=かなり易しかった、4=易しかった、3=普通、
2=難しかった、1=かなり難しかった。

(出典：教養教育教務委員会調査資料抜粋)

専門教育科目の編成と授業科目の配置：

医学科では、専門教育課程を、①基礎医学系、②臨床基礎医学系、③臨床医学系、及び、④社会医学系に区分し、コア・カリキュラムに基づき体系的に（すなわち、「基礎系→臨床と基礎の両要素をもつ臨床基礎系→臨床系・社会医学系」という図式で）編成している。各系では、「形態から機能へ」、「分子→細胞→システム（器官系）→個体へ」、「正常から異常へ」、「診断から治療へ」、「講義から実習へ」等、学生が医学的知識を系統的・効率的に習得できるように授業科目を編成している（別添資料2）。平成19年度にセメスター制を導入するとともに、基礎医学系のカリキュラムを中心に改訂した（別添資料3）。4年次末

に施行される、臨床前教育に関する知識と実技の全国共用試験に合格した後、5年次の臨床実習教育に入る。5年次の大学附属病院と県立中央病院での各診療科の臨床実習に加え、6年次には選択制臨床実習が富山県内の11の関連教育病院（平成19年度：65名履修）や海外の大学病院（平成19年度：韓国忠南大学病院等 5名履修）で実施されている。

看護学科では、専門教育課程を①人間科学系、②基礎看護学系、③臨床看護学系、及び、④地域・老人看護学系に区分し、看護の概念枠組である「人間」、「環境」、「健康」、「看護」を柱とし、健康のレベル、人間成長発達モデル及び援助の過程を想定して、編成している。各系では「基礎から応用へ」、「個から全体へ」、「講義から演習さらに実践へ」と進むことを重視した授業科目の編成となっている。平成17年のカリキュラムの改訂時に、①卒業研究充実を目指して単位を増加、②臨地実習の前倒しによる4年次の過密スケジュールの解消、③本学の特性を活かした「東洋の知と看護」、「最先端医療と看護」の導入、さらに、④看護実践能力を充実させるため卒業前の総合実習の導入などを組み込んだ教育課程を策定した（別添資料4）。基礎看護学並びに成人看護学、母性・小児看護など国家試験受験資格要件となる臨地実習23単位の実習は、富山大学附属病院をはじめ、県内22の医療施設・保健福祉施設の協力を得て実施している。また、平成17年から臨床教授制を導入し、平成18年から附属病院看護部と協力しシャドウ研修を導入している。

観点2-2 学生や社会からの要請への対応

（観点に係る状況）

学生の多様化への対応：

教養教育では選択科目の充実を図るほか、自然科学系必修科目では習熟度別クラス編成を行い、基礎知識の習得が十分に行われるよう配慮している。

医学科ではカリキュラム編成上専門科目が低学年から開講されるようになってきたため、それまでの3年次学士編入制度を平成19年度から2年次編入に変更した。この結果、編入生、教員とも履修上の負担が軽減された。

看護学科は、看護学校や短期大学卒業生（すなわち看護師免許既取得者）を対象とした3年次編入を実施している（資料2-2-1）。これは、本学看護学科が県内唯一の看護大学であり、キャリア教育への期待が大きいことに応えたものである。

編入学生への配慮として、医学科では大学等で修得した単位を39単位まで認定し、看護学科では短期大学等で修得した単位を94単位まで認定している。

資料2-2-1 医学部看護学科第3年次編入学志願者数及び入学者数

19年度		18年度		17年度		16年度		合計	
志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者
51(15)	10(3)	44(11)	10(3)	23(6)	10(3)	34(6)	10(3)	152(38)	40(12)

（ ）内は県内専修学校卒業生（内数） （単位：人）

（出典：入試チーム資料より抜粋）

社会的要請への対応：

教養教育では、国際的視野に立った人材を養成するため、外国語科目におけるTOEFL、TOEIC等の単位認定（資料2-2-2）や、コンピュータ支援言語学習システム（CALL）による自主学習（平成19年度：22名受講）、ニュージーランドにおける海外短期英語研修プログラム（平成18年度：14名参加、平成19年度：5名参加）などに取り組んでいる。

医学科では、地域の医師不足を解消するために、平成19年度から地域枠の推薦入試を開始した。地域枠での入学者は19年度は6名、20年度には8名を確保できた。

看護学科では、地域からの要請に従い助産専攻コースを平成16年から開設し、年間7～9名を養成している。

資料 2-2-2 英語の単位認定の実績

年度	実用英語技能検定	TOEIC	TOEFL
18	1	7	1
19	1	13	2

(単位：人)

(出典：教務チーム資料より抜粋)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

学生の経歴や学力は多様化してきており、きめ細かな対応が求められてきている。このため、教養教育では習熟度別クラス編成の導入、大学以外での学習に対する単位認定、既修得単位の認定などを導入し、効果を挙げている。医学科では、平成 19 年度に Semester 一制の導入に加え、カリキュラムの改定を行った。さらに、地域医療への参画・貢献に対応するため、地域卒の推薦入試及び 選択制臨床実習による地域病院での実習を導入している。看護学科では平成 17 年度にカリキュラムを改訂し、「人間」、「環境」、「健康」、「看護」を柱とし、「基礎から応用へ」、「個から全体へ」、「講義から演習さらに実践へ」と進むことを重視した授業科目の編成を実現している。

以上のことから、医学部の教育内容は、期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点毎の分析

観点3-1 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

授業形態：

医学部の授業科目は、講義、演習、実験、実習等の授業形態をバランスよく配している。特に1年次を対象とした「医療学入門」においては、講義、グループ討議、全体討議、演習、コミュニケーション技法等を学んだ後、老人保健施設、重症心身障害者・知的障害者施設等における介護体験実習を実施している。本実習は、医療人としての基本的知識や技能そして態度の育成をねらいとしている。

医学科では、平成18年度から virtual slide system (e-ラーニングシステムの一つ) による形態学実習(組織学、病理学)を開始した。本システムにより、実習の効率化のみならず、課外での自習の便を図ることができた。また、本システムを利用した学生にアンケート調査を行った結果、操作性、利便性については、システム導入に好意的な評価を下している(資料3-1-1)。

資料3-1-1 組織学実習アンケート調査結果

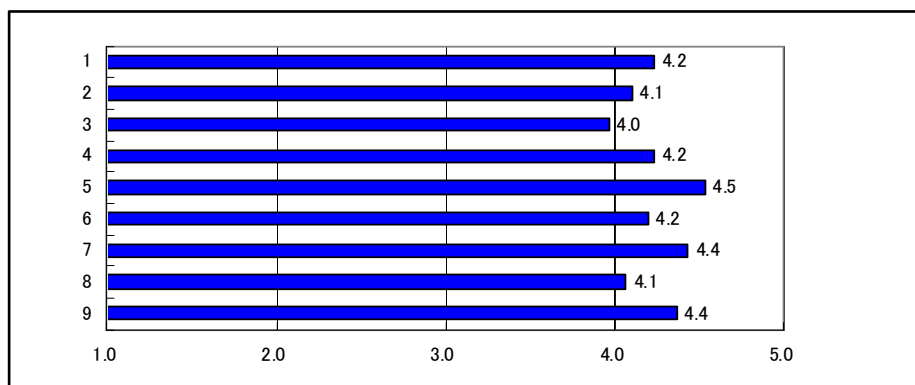
	1年次生(回答者88名)						3年次生(回答者58名)					
	5点	4点	3点	2点	1点	他	5点	4点	3点	2点	1点	他
1. 操作性												
(1)システムの操作性	47	34	14	5	1	0	59	33	5	3	0	0
(2)標本の検索速度	52	31	9	8	0	0	57	31	10	2	0	0
(3)適切な部位の検索速度	41	30	23	6	0	1	53	29	10	3	3	0
(4)組織の解像度	35	32	18	14	1	0	43	29	14	9	5	0
2. 利便性												
(1)時間的な制約	23	20	18	18	20	0	17	17	14	17	31	3
(2)物理的な制約	34	20	31	8	5	2	14	19	19	16	29	3
(3)組織構造の理解のしやすさ	35	32	23	9	1	0	45	33	12	7	0	3
(4)情報の得やすさ	40	33	17	7	2	1	47	19	24	3	5	2
(5)討論のしやすさ	32	26	31	7	2	2	43	28	22	2	3	2
3. モチベーション												
	10	56	30	3	1	0	24	43	22	5	3	2

【注】いずれの項目も5点満点、表中の数字は%

(出典：医学科教務委員会調査資料より抜粋)

平成17年度から、医学科の医学英語Ⅰ(3年次後期)と医学英語Ⅱ(4年次前期)のカリキュラム改訂に着手し、教養教育英語担当教員と医学科専門教員との相互協力による少人数コース制カリキュラムへと移行しつつある。具体的には、平成19年度後期より、教養教育担当教員(日本人、専任外国人、非常勤外国人各1名)と医学科専門教員(2名)が交互に分担し、1学年を4つのグループに分けて授業を展開している。学生の授業アンケート(資料3-1-2)では高い評価が示されている。

資料 3-1-2 医学英語のアンケート結果 (平成 20 年 1 月実施)



(縦軸は質問項目。5点満点、全体平均は 4.24)

【質問項目】

1. あなたの受講姿勢は良好ですか？
2. あなたの受講マナー（遅刻しない、私語を慎む）は良好ですか？
3. 受講講前と比べて、授業内容について興味が増しましたか？
4. 教員の教え方は工夫されていますか？
5. 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすいですか？
6. 情報の伝え方（白板、スライド、プリントなど）は適切ですか？
7. 授業は学生の反応を見ながら進められていますか？
8. この授業の内容はどの程度理解できましたか？
9. 授業はシラバスに沿って行なわれましたか。

(出典：医学科教務委員会調査資料より抜粋)

少人数教育について、医学科では3年次からの専門教育科目においてチュートリアル教育による問題解決型学習を実施している。また、3年次末には、基礎系講座（一部臨床系講座を含む）に配属し、研究の一端に触れさせている。さらに6年次では、富山県内の中核病院等において臨床アドバンスト・コースを実施し、地域医療の一端に触れる機会を提供している。看護学科においても臨地実習、助産学ゼミナール及び卒業研究において少人数クラス（チーム）での実習・演習を行っている（資料3-1-3）。

資料 3-1-3 少人数教育の具体例

医療学入門 グループ討議（10人程度に分かれての討議）
介護体験実習（1施設2人程度に分かれての体験実習）

医学科

- ・基礎研究体験実習（3人程度に分かれての各研究室での体験実習）
- ・チュートリアル教育（8～9人に分かれての問題解決型少人数教育）
- ・臨床実習（4～5人に分かれての病院での実習）
- ・選択制臨床実習（1～5人に分かれての実習）
 - 生命科学アドバンスト・コース
 - 臨床アドバンスト・コース
 - 海外臨床研修コース

看護学科

- ・臨地実習（5～6人に分かれての厚生センター、病院等での実習）
- ・助産学ゼミナール（5～6人に分かれて課題研究）
- ・卒業研究（5～6人に分かれて研究）

・看護学各論科目におけるグループ討議やロールプレイング

(出典：教務チーム資料より抜粋)

学習指導：

履修にあたっては、新入生オリエンテーション、チュートリアルについての説明会、基礎体験実習の説明会等の指導を行っている。シラバスは全学統一のWEB版のほか、毎回の授業の主題と位置づけ、学習方法と内容などを入れた冊子体を作成し、便宜を図っている(資料3-1-4、別添資料2)。

資料3-1-4 シラバスの構成

「授業科目名」、「担当教員」、「授業科目区分」、「授業種別」、「開講学期曜限」、「対象所属」、「対象学年」、「単位数」、「連絡先」、「オフィス・アワー」、「リアルタイム・アドバイス」、「授業のねらいとカリキュラム上の位置付け(一般学習目標)」、「教育目標」、「達成目標」、「授業計画(授業の形式、スケジュール等)」、「キーワード」、「履修上の注意」、「教科書・参考書等」、「成績評価の方法」、「関連科目」など基本的情報を入れ、さらに冊子体には、「毎回の授業の主題と位置づけ」、「学習方法と内容」を追加。

(具体例は、別添資料2を参照のこと。)

(出典：教務チーム資料より抜粋)

学期末には学生へ授業評価アンケートを行い、シラバスに対応した授業が行われたか等について調査している(資料3-1-5)。その際、前年度の評価点も盛り込み、授業の改善の具合が教員にフィードバックできるよう配慮している。

資料3-1-5 学生への授業評価アンケート結果の例(平成19年度教養教育科目)

質問項目9. 授業はシラバスに沿って行われましたか。

5(強くそう思う)・・・18名
4(ややそう思う)・・・31名
3(普通)・・・26名
2(あまりそう思わない)・・・4名
1(全くそう思わない)・・・0名

平均3.8 (昨年同時期3.7)

(出典：教務チーム資料より抜粋)

観点3-2 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

授業科目の履修にあたっては、オフィス・アワーや連絡方法を明記することにより、授業時間外であっても担当教員から個別に直接指導を仰ぐことができるよう配慮している。入学時(1年次生及び編入生)に教員がオリエンテーションを実施し、履修上の注意点を説明する機会を設けている。

教養教育科目に関しては、殆どの担当教員が授業外学習課題を設定し、その成果を小テスト等で評価することにより、授業外学習を継続的に行うよう指導をしている(資料3-2-1)。なお、「あまり指示していない」、「あまり取り入れていない」という回答は、主として体育実技などの授業時間外での学習が難しい科目である。

資料3-2-1 授業時間外の学習

	よく指示している	指示している	あまり指示していない
授業時間外の学習の指示	5 (24%)	11 (52%)	5 (24%)
	よく取り入れている	取り入れている	あまり取り入っていない
授業時間外の学習の評価(成績)	7 (33%)	9 (43%)	5 (24%)

(回答数 21) (単位: 人)

(出典: 平成 19 年度 教養教育担当教員に対するアンケート結果)

医学科では、クラス担当教員を各学年 2 名配し、きめ細かい相談・指導体制を作っている。チュートリアル教育の導入により、授業時間以外の自己学習・グループ学習を行う習慣を身に付けさせ、24 時間自主学習を行える環境・施設として図書館及び情報系実習室のほか、チュートリアル教育用の部屋も設けてある。また、3 年次の基礎研究体験実習コース、6 年次の生命科学アドバンスト・コースなど、基礎的研究にも興味を抱くことが出来るような機会を提供している。

看護学科にあっては、学年毎に 2 名の教員がクラス担任となりクラスアワーなどを通して指導に関わっている。また、3 年次後期からは卒業研究担当指導教員が研究指導を通して個別に進路などの相談に乗っている。専門科目では助産ゼミナールのように問題解決型学習方式による学生の主体性を尊重する学習の試みも実施している。臨地実習では、臨床の協力を得ながら中間カンファレンスや実習終了時のカンファレンスなどで学習の共有化を図っている。

以上のように、医学科・看護学科とも、専門科目において単位の実質化が図られるよう配慮されている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

医学部では平成 10 年以來、シラバスを作成し、教員、学生に配布しており、学習者の便宜を図っている。また、学生の主体的な学習を促し、専門科目の単位の実質化を図るための環境が整備されており、授業時間外に自己学習・グループ学習を行える環境を提供している。

教養教育では授業外学習課題を設定し、学生の授業時間以外での学習を促している。

医学科では 1 年次に、早期基礎臨床体験実習、医療学入門、介護体験実習などで少人数教育・実習を行い、勉学のモチベーションを高める工夫をしている。医学英語教育では専門科目の教員の参加を得、英語でのコミュニケーション力の向上に取り組んでいる。IT 技術を実習に導入する工夫として、組織学及び病理学実習において virtual slide system を導入している。基礎医学の面白さを体験させる機会として、3 年次生に基礎研究体験実習、6 年次生に生命科学アドバンスト・コースの選択を可能としている。小グループのチュートリアル学習の導入、地域の関連教育病院で地域医療を体験する臨床アドバンスト・コース、海外の大学病院での臨床研修コースなど、多様な実習形態を用意している。

看護学科では視聴覚教材による授業や解剖など、直接的な学習に加え、看護学各論科目においてはグループ討議やロールプレイングなど、実際に即した場面設定による実演・演習を通して学習を展開している。さらに、臨地実習においては受け持ち制による少人数による個別指導を展開し学生の学習の充実を図っている。

以上のことから、医学部の教育方法は期待される水準にあると判断される。

分析項目IV 学業の成果

(1) 観点毎の分析

観点4-1 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

国家試験における平成16年以降の新卒者の平均合格率(資料4-1-1)は、平成17年の保健師国家試験は別として、いずれも全国平均を大きく上回っている。

学会での発表を行った学生もあり、平成17年3月の第110回日本解剖学会全国学術集会において3年次生が「Quantitative analysis of arterial branches of the left ventricular free wall」を発表し、学生セッション優秀賞を受賞した。また、平成19年3月の第96回日本病理学会学術集会において5年次生が「乳幼児突然死症候群と診断された症例の死因の検討—特に肺泡出血と微小脳石灰化について」を発表し、学部学生ポスター部門優秀賞を受賞した。

資料4-1-1 国家試験合格率(新卒)

	医師国家試験		看護師国家試験		保健師国家試験		助産師国家試験	
	本学	全国平均	本学	全国平均	本学	全国平均	本学	全国平均
平成16年	94.4%	88.4%	98.1%	91.2%	96.9%	92.3%	100.0%	96.2%
平成17年	93.4%	89.1%	98.4%	91.4%	73.2%	81.5%	100.0%	99.7%
平成18年	97.0%	90.0%	96.5%	88.3%	86.6%	78.7%	100.0%	98.1%
平成19年	95.8%	87.9%	96.6%	90.6%	100.0%	99.0%	100.0%	94.3%

(出典：厚生労働省国家試験合格発表資料より抜粋)

段階的な学力の修得を担保するため、医学科では第2年次及び第4年次末において、看護学科では第2年次及び第3年次末において修得した単位数が進級基準に達しない場合は、次年次へ進級することができないようになっている。この制度は厳密に運用されており、結果的に卒業時の学力や能力を担保することに結びついている。例として平成18年度の留年者、休学者、退学者の状況を資料4-1-2に示す。

資料4-1-2 留年者、退学者等状況(平成18年度)

医学科2年次留年者 15名(内休学者3名)(15.3%)
 医学科4年次留年者 0名
 看護学科2年次留年者 3名(内休学者3名)(4.9%)
 看護学科3年次留年者 4名(内休学者2名)(5.6%)

医学科休学者 7名(1.2%) 医学科退学者 2名(0.3%)
 看護学科休学者 6名(2.3%) 看護学科退学者 1名(0.4%)

(出典：教務チーム資料より抜粋)

観点4-2 学業の成果に関する学生の評価

(観点にかかる状況)

医学部は、授業科目ごとに授業評価アンケート調査を実施している。教養教育科目に関する授業評価アンケートによれば、5点満点で平成18年度は平均3.49、平成19年度は平均3.76となっている(資料4-2-1)。平成18年度に行った医学科専門科目に関する授業評価アンケートによれば、全体の平均点は4点満点で3.19であった(資料4-2-2)。また看護学科にあつては、5点満点で3.4~3.8であった(資料4-2-3)。教養・専門科目ともいずれも講義に対する学生の満足度が高いことがわかる。

平成19年度臨床実習を終了した5年次医学科学生に対するアンケートでは、全体を通じて5段階評価で3以上(普通~良い)が約90%を占めた。(5:26%, 4:37%, 3:

26%, 2 : 8%, 1 : 3%)

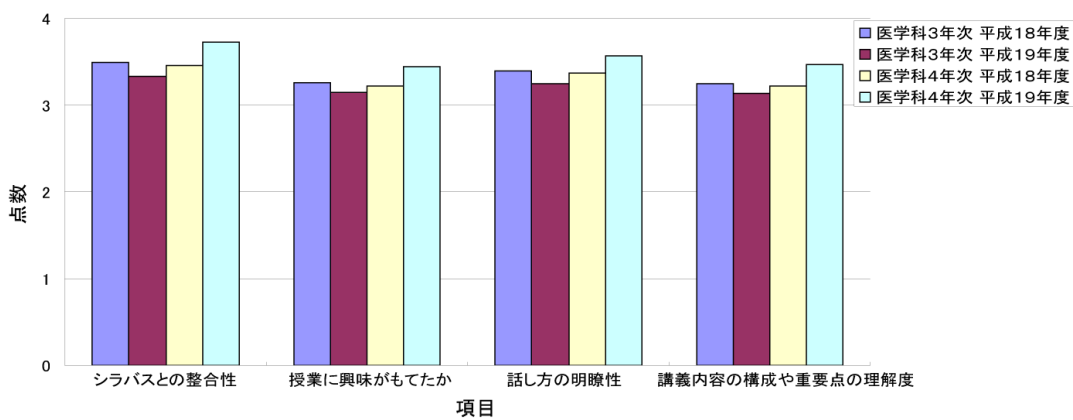
資料4-2-1 教養教育科目の授業評価アンケート結果(全科目)

設問 1	設問 2	設問 2	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10	全体平均	
貴方の所属は？	自分の受講態度は良好だったか？(質問・発言等)	自分の受講マナーは良好だったか？(遅刻・私語等)	授業に興味を持てたか？	教え方は工夫されていたか？	話し方は明瞭で聞きやすかったか？	情報の与え方(黒板、プリントなど)は適切か？	学生の反応を見ながら進められていたか？	シラバスに沿っていたか？	理解(かなり難しい(5)〜かなり易しい(1))		
H 18	略	3.34	3.50	3.49	3.53	3.60	3.55	3.52	3.47		3.44
H 19	略	3.57	3.73	3.78	3.81	3.87	3.71	3.77	3.68	3.92	3.76

(単位：点 [5点満点])

(出典：教務チーム資料より抜粋)

資料4-2-2 専門医学科目の授業評価アンケート結果(3, 4年次生)



(平成19年度のデータは、平成19年12月までの暫定データ)

(単位：点 [4点満点])

(出典：医学科教務委員会調査資料より抜粋)

資料4-2-3 看護学科の授業評価アンケート結果(全科目)

	設問 1	設問 2	設問 2	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10	設問 11
	あなたの受講姿勢(出席率など)	あなたの受講マナー	学習目標が明確で順序立っていましたか?	資料1・2・3に前出	授業の分量は適切でしたか?	資料1・2・3に前出	質問の時間(授業時間外を含む)ありましたか?	重要な点を強調してくれましたか?	板書・プリント。スライド等は適切でしたか?	授業の進行速度は適切でしたか?	声は明瞭で、聞き取りやすかったですか?
H 17	3.76	3.75	3.61	略	3.60	略	3.54	3.77	3.64	3.62	3.78
H 18	3.80	3.77	3.53	略	3.56	略	3.42	3.60	3.60	3.60	3.72

(単位：点 [5点満点])

(出典：教務チーム資料より抜粋)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

医学科では、①基礎医学講座で行った研究が当該領域の全国学会学生部門で優秀賞を授与された(2名)。②医師国家試験の合格率は例年全国平均を凌駕している。③学生の授業に対する評価は4点満点で3.19と高い。④臨床実習の評価でも5点満点で4点以上が約2/3を占めている。看護学科でも、①看護師を始めとする国家試験で高い合格率を維持している、②学生の授業に対する評価は、5点満点でほとんどの項目が3.5を超えている。

以上のことから、医学部の学業の成果は、期待される水準にあると判断する。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点毎の分析

観点 5-1 卒業（修了）後の進路の状況

(観点に係る状況)

卒業後の進路については、医学科学生は国家試験合格後、全員臨床研修医となっており、平成17年及び平成18年に富山県内の医療機関で研修した者は70名(卒業生全体の38.0%)、看護学科では、76名(同60.3%)であった。なお看護学科卒業生126名の進路は、95名(75.4%)が看護師、8名(6.3%)が保健師、9名(7.1%)が助産師、14名(11.1%)が進学(大学院あるいは助産師養成学校、養護教諭養成学校)であった(資料5-1-1)。

資料 5-1-1 医学部卒業後の進路

	H17	H18
医学科	研修医	研修医
富山 (本学)	37 (29)	33 (16)
県外	50	64
計 (本学)	87 (29)	97 (16)

H17

看護学科	看護師	保健師	助産師	進学	計
富山 (本学)	24 (18)	2 (0)	2 (0)	7 (7)	35 (25)
県外	20	1	3	4	28
計 (本学)	44 (18)	3 (0)	5 (0)	11 (7)	63 (25)

H18

看護学科	看護師	保健師	助産師	進学	計
富山 (本学)	32 (21)	3 (0)	4 (2)	2 (1)	41 (24)
県外	19	2	0	1	22
計 (本学)	51 (21)	5 (0)	4 (2)	3 (1)	63 (24)

(単位：人)

(出典：学生支援チーム資料より抜粋)

観点 5-2 関係者からの評価

(観点に係る状況)

卒業予定者等へのアンケート：

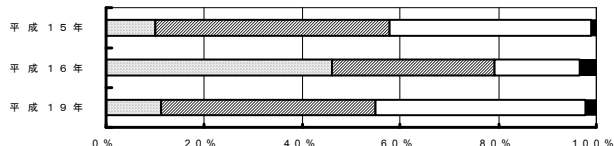
医学科では、6年次の卒業試験時期にアンケートを行い、1)カリキュラム、2)スタッフの教育への取り組み、3)教育設備、4)成績評価、進級判定、5)本学の周辺環境、の5項目について調査している。この結果、「教育カリキュラム」及び「成績評価」は16年度生を除くと、「どちらかといえば良い」以上が約90%を占めている(資料5-2-1：16年度生は入学後カリキュラムが頻繁に変更された学年であり、「教育カリキュラム」に関しては少々厳しい評価を下している。よって、参考のために、15年度生のデータも示した)。「教育への取り組み」については、FDの導入の効果もあり、「大変良い」の評価が微

増している。

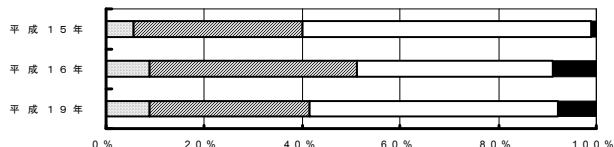
看護学科では、卒業・修了生からの要望として、看護実践の即戦力を身に付けるための科目の充実、養護教諭1種取得コースの設置や、ホームページの充実や就職・転職・進学などの相談窓口開設の要望があった。なお、卒業生の希望の推移をみるためには、短期間の卒業生のデータでは判別が付きにくいので、第1期から9期までの卒業・修了生を対象としたアンケート調査の結果を示した（別添資料5）。

資料5-2-1 医学科卒業予定者へのアンケート結果

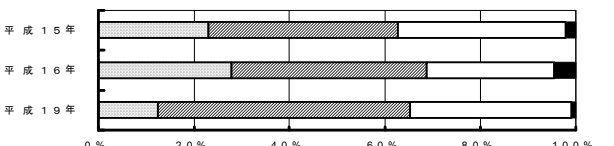
1. 医学教育カリキュラム



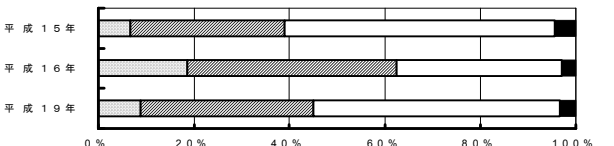
2. 教育スタッフの教育への取り組み



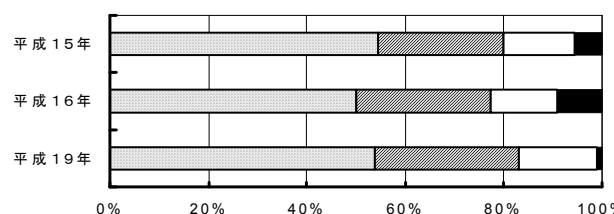
3. 教育設備



4. 成績評価、進級判定



5. 周辺の環境



かなり改善すべき
 どちらかといえば良い
 良い
 大変良い

(出典：医学科教務委員会調査資料より抜粋)

卒業生の就職先に対するアンケート：

医学科では平成18年度卒業生のうち本学附属病院以外の研修病院で研修を開始した73名について、知識、態度、技能の評価を収集した。回答の得られた46名（回収率63%）に関する評価（資料5-2-2）は、知識、態度、技能の各項目とも、殆ど全ての質問に

において、「十分ある」が半数以上を占めた。

看護学科では、就職先にアンケートを実施した結果、看護実践能力に関しては、卒後 1～2 年では臨床現場の期待に応える高さではないものの、卒後 3～5 年経つと向上していた（資料 5-2-3）。このことは、卒後 1～2 年では新卒として自信がないが、基礎的能力が大学の教育で十分身に付いているため、3～5 年経つと実力が発揮できているということを示している。なお、卒後 1～2 年の卒業生のデータだけでは、就職先の調査対象が少ないため、卒後 3～5 年まで範囲を拡げ、できるだけ広範囲な意見を取り入れるようにアンケート調査を実施した。

資料 5-2-2 医学科卒業生の就職先（研修病院）に対するアンケート結果(平成 19 年 12 月実施)

	十分ある	まあまあある	十分とはいえない	不十分である
1. 知識				
①初期研修に必要な基本的医学知識	28	17	1	0
②医師としての基本的な医療倫理	27	19	0	0
2. 態度				
①協調性	35	11	0	0
②諸規則の遵守	33	12	0	1
③適切な言葉使い	35	11	0	0
④患者さんへの共感的態度	27	18	0	0
⑤責任感	33	13	0	0
⑥自己学習の習慣	26	18	2	0
⑦積極性	28	14	4	0
3. 技能				
①問診、診察、診療計画の立案	24	20	2	0
②過不足のないカルテ記載	29	15	2	0
③インフォームド・コンセントの実施	21	20	4	0

(表中の数字は卒業生人数)

(出典：医学科教務委員会調査資料より抜粋)

資料5-2-3 看護学科卒業生の就職先に対するアンケート結果

	卒後 3～5年	卒後 1～2年
	27 施設中	29 施設中
1) 人の尊厳の重視と人権の擁護を基本に据えた援助行動	92.6	82.8
2) 患者の意思決定を支える援助	88.9	72.4
3) 多様な年代や立場の人との援助的人間関係の形成	96.3	79.3
4) 看護計画立案・実施・評価の展開	92.6	62.1
5) 人の成長発達段階・健康レベルの看護アセスメント	100	69.0
6) 生活共同体における健康生活の看護アセスメント	96.3	72.4
7) 看護の基本技術の適確な実施	96.3	75.9
8) 健康の保持増進と健康障害の予防に向けた支援	88.9	65.3
9) 次世代を育むための援助	81.5	79.3
10) 慢性的疾病を持つ人への療養生活支援	77.8	69.0
11) 治療過程・回復過程にある人への援助	92.6	75.9
12) 健康の危機的状況にある人への援助	74.1	62.1
13) 高齢期にある人の健康生活の援助課題の判断と支援	85.2	58.6
14) 終末期にある人への援助	59.3	44.8
15) 地域ケア体制の充実に向けた看護の機能	59.3	32.0
16) 看護職チーム・保健・医療・福祉チームでの協働・連携	74.1	93.1
17) ヘルスケア提供組織の中での看護の展開	77.8	44.6
18) 看護実践充実にかかわる研究成果の収集と実践への応用	66.7	37.9
19) 看護実践を重ねる過程で専門性を深める方法の修得	85.2	48.3

注：表中の数字は「できる」と回答した施設の割合（％）。

卒後3～5年は平成13, 14, 15年度卒業生, 1～2年は平成16, 17年度卒業生を指す。

(出典：看護学科教務委員会調査資料より抜粋)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

医学部卒業生は大部分が国家資格に合格している。合格者は研修医、看護師、保健師、助産師として、医療機関に就職している

卒業予定者へのアンケート調査からは、カリキュラム、教員の取組状況、成績評価・進級判定に関して、学生が満足しているとみなすことができる。本学附属病院以外の研修病院から得た卒業生の評価からは、医学科学生としての基本的なレベルに達しているものと判断される。

看護学科にあっては、卒後2～3年で多くの卒業生は、特に対象の健康の課題をより明確に把握し、着実に看護実践能力を伸ばし、社会の期待するレベルに達していると判断される。

以上のことから、医学部の進路・就職の状況は、期待される水準にあると判断する。

Ⅲ 質の向上度の判断

① 事例1「FDとワークショップの実施」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取り組み)

医学部では教養教育, 医学科, 看護学科のそれぞれにおいてFDやワークショップを開催し, 医学部の教育の問題点を検証し, 教育の改善を図るべく努力してきている(資料1-2-1, p8-5~6)。平成16年度は医学科, 看護学科とも2回の開催に留まったが, 平成18年度には医学科は5回, 看護学科は1回開催した。平成19年度には, 医学科は3回, 看護学科は1回, さらに医学部・薬学部・学科目の合同で1回開催した。ことに医学科では平成17年度に, 看護学科では平成19年度に学生をFDに参加させ, 教員とともに教育の改善方策について検討した。この結果, 医学科学生による授業評価アンケート調査では平成16年度に比べ19年度には授業の満足度, 理解度ともに上昇している(資料1-2-2, p8-6)。看護学科においても授業評価アンケート結果は, 平成17から19年度にかけて高い評価を保っている(資料1-2-3, p8-7)。

以上のことからFDとワークショップの実施状況は, 平成16年度以降高い水準を維持していると判断する。

② 事例2「国家試験合格率」(分析項目Ⅴ)

(質の向上があったと判断する取り組み)

本学部の在校生及びその家族は医師や看護師等の国家試験に合格することを期待している。段階的な学力修得を担保するため, 医学科, 看護学科とも進級基準を設けている。この進級制度は厳格に運用されており(資料4-1-2, p8-15), 卒業時の学力や能力を担保することに結びついていると考えられる。その結果として, 平成16年度以降, 医師国家試験, 看護師・保健師・助産師国家試験の合格率(新卒)は全国平均を上回っている(資料4-1-1, p8-15)。唯一, 平成17年度の保健師国家試験合格率が全国平均を下回ったが, 講義形態や実習内容に改良を加えた結果, 平成18年度以降の同試験の合格率はそれ以前の水準に復帰した。

以上のことから国家試験の合格状況は, 平成16年度以降高い水準を維持していると判断する。